

大地と里山とともにのびゆく郷土 —秋葉区の歴史—



古津八幡山遺跡（国史跡）

行き交う古代の人々

新津丘陵北西部に位置する^{ふるつはちまんやま}古津八幡山遺跡は、弥生時代後期の大規模な高地性環濠集落^{かんごう}で、断続的につらなる二重の濠^{ほり}をめぐらし外敵に備えていた。遺跡から出土した弥生土器には3つの系統がある。縄文とヘラで描いた文様をもつ東北系、薄板で土器の表面をなでて刷毛目^{はけめ}をつける北陸系、東北系の器の形でありながら、縄文文様はなく刷毛目がついた在地系の3つである。3系統の土器がほぼ同じ割合で含まれていることは、この地が日本海や阿賀野川を介して、北陸地方や東北・会津地方と交流を行っていたことを物語っている。

古津八幡山の高地性環濠集落は、弥生時代終末期に途絶えるが、約150年後の4世紀後半から5世紀初めころに、古津八幡山古墳が築かれる。直径60mの県内最大の円墳で2段に築かれている。墳丘部分の築成には、古墳の周縁に沿っ

て土手状の盛土をして土手の中へ土を盛る西日本的工法と、中央に小丘を作って周囲へ土を盛っていく東日本的工法の折衷方式が用いられていることから、東西の土木工法を知る畿内の技術者がかかわった可能性がある。



古津八幡山古墳(国史跡)

くそうず 草水の発見

慶長13(1608)年、加茂町の真柄^{まがらにへえ}仁兵衛は、新田開発の適地を探すため、新津丘陵周辺を回るうちに石油が染み出す場所をいくつか発見した。その内のひとつが、市指定文化財の「煮坪^{にえつぼ}」である。仁兵衛は新発田藩の許可を得て、^{あまがさわ}天ヶ沢・^{かなつ}金津・^{しおたに}塩谷・^{がらめき}柄目木の4か所の油井の開発に成功し、柄目木新田に転居した。油の汲み取りと灯油の販売をなりわいとした真柄家は、藩へ役銀を納入し、明治の初めまで天ヶ沢新田の分家とともに4か所の油井の営業権を保持した。



煮坪 秋葉区草水町(市史跡)

石油王の誕生

金津村では、名主の坂井彦兵衛が新発田藩からの許可を得て油の汲み取りを行っていたが、文化元(1804)年、後任名主の中野次郎左衛門に営業権を売り渡した。次郎左衛門は「泉舎^{いずみや}」と号し、油を取っていた。

明治5(1872)年、政府は鉱山資源を国有化し、翌年には鉱業事業への自由な参入を促した。金津村の中野貫一は、同7年に借区^{しやくく}の許可を得て手掘り採掘を試み、出油に成功した。

同19年、新潟県は共同掘による「日本坑法」違反を理由として、貫一をはじめとする塩谷村地内の借区人の石油採掘を禁止し、借区権の返納を命じた。ところが、元工部省

灯台局の職員・田尻義隆が塩谷坑区の借区を申請すると、同21年許可が下り、田尻は自ら採掘を行うことなく、東京の日本坑油会社に借区権を売却してしまった。

貫一は、「借区禁止は田尻らの策謀である」として、県知事をはじめ農商務大臣、内閣総理大臣に請願を重ねたが、採択されなかった。そこで貫一は、明治24年、農商務大臣(のちに新潟県知事に変更)を相手どり、東京の行政裁判所に訴えた。借区禁止の取り消しを勝ち取った貫一は、政府から損害賠償金を得たが、塩谷坑区の借区を回復することはできなかった。

貫一は、失った塩谷坑区の産油量の挽回ぼんかいを図るため、明治28(1895)年、金津地区の深層探脈に上総掘かすさほりの技術を導入して産油に成功した。さらに同36年、機械掘に成功して産油量も増大し、当時の二大石油会社であった日本石油・宝田石油に次ぐ産油業者となり、「石油王」と呼ばれるまでになった。

大正期になるとロータリー掘削機の登場により、小口・朝日方面で油層が発見された。中野家が経営する中央石油所有の新津油田朝日鉱区では、大正5(1916)年に年間約27,000キロリットルの産油を記録し、第2次全盛期を迎えた。その後、輸入石油の増加や産油量の減少もあり、平成8(1996)年、中野家経営の丸泉石油興産まるいずみせきゆうこうさんが原油採掘を終了し、新津油田の歴史に幕が降りた。

現在、貫一とその子忠太郎の親子2代が築いた邸宅と庭

園は、中野邸美術館として公開され、秋には色鮮やかな紅葉が、多くの観光客の目を楽しませている。



上総掘石油槽(2/3復元模型)
石油の世界館 秋葉区地域課提供

花の名産地



日本一の生産量をほこる秋葉区のボケ
食と花の推進課提供

チューリップの球根は、大正期こあいに小合地区で大規模な商業生産が始まった。戦時色が濃くなると、食料増産のために栽培が制限され、食用やでんぷん加工用となった。

昭和23(1948)年、小合村を本拠とする新潟県花卉輸出協会が設立され、再びチューリップの球根の輸出が始まった。昭和30年代に生産量を伸ばしたが、昭和40年代には連作障害などにより停滞傾向となり、切花栽培へと置き換わっていった。

戦前から栽培されていたアザレアとサツキは、生産が拡大し、昭和40年代に活況を呈した。昭和40年代後半に小須戸地域の生産者によって接木栽培技術つぎきが確立され生産量が拡大したボケは、小須戸・小合・白根地区が国内生産量の9割を占め、質・量ともに全国1位の生産地となった。

鉄道の街

明治30(1897)年、北越鉄道の沼垂やしろだ～ノ木戸(現東三条駅)間が開通し、新津・矢代田両駅が開業した。同39年の鉄道国有法により、翌40年、北越鉄道が国有化されて信越線の一部となった。同43年には岩越線ばんえつさいせん(現磐越西線)新津まおろし～馬下間が、大正元(1912)年には新発田線うえつ(現羽越本線)新津～新発田間が開通して新津は3路線4方向の分岐点となった。

同2年には新津機関庫、翌3年には新津運輸・保線両事務所、新津車掌所及び新津通信区、同5年には新津電力区が開設された。さらに昭和14(1939)年には新津電修場、同16年には車両整備のための新津工場が開設され、鉄道の街として発展を遂げた。

昭和58(1983)年に新津駅近くの旧国鉄施設を利用して開館した鉄道資料館は、平成10(1998)年に区東部に位置する旧新潟鉄道学園に移転した。同25(2013)年には、C57型蒸気機関車と200系新幹線を運び入れ、展示を改修して、翌26年に新装開館した。また、昭和44(1969)年か

ら新津第一小学校で保存されていたC57型蒸気機関車が、平成11年に「SLばんえつ物語」号として復活し、新潟(当初は新津)～会津若松間を運行している。



新発田線全通当時の新津停車場扇形機関庫